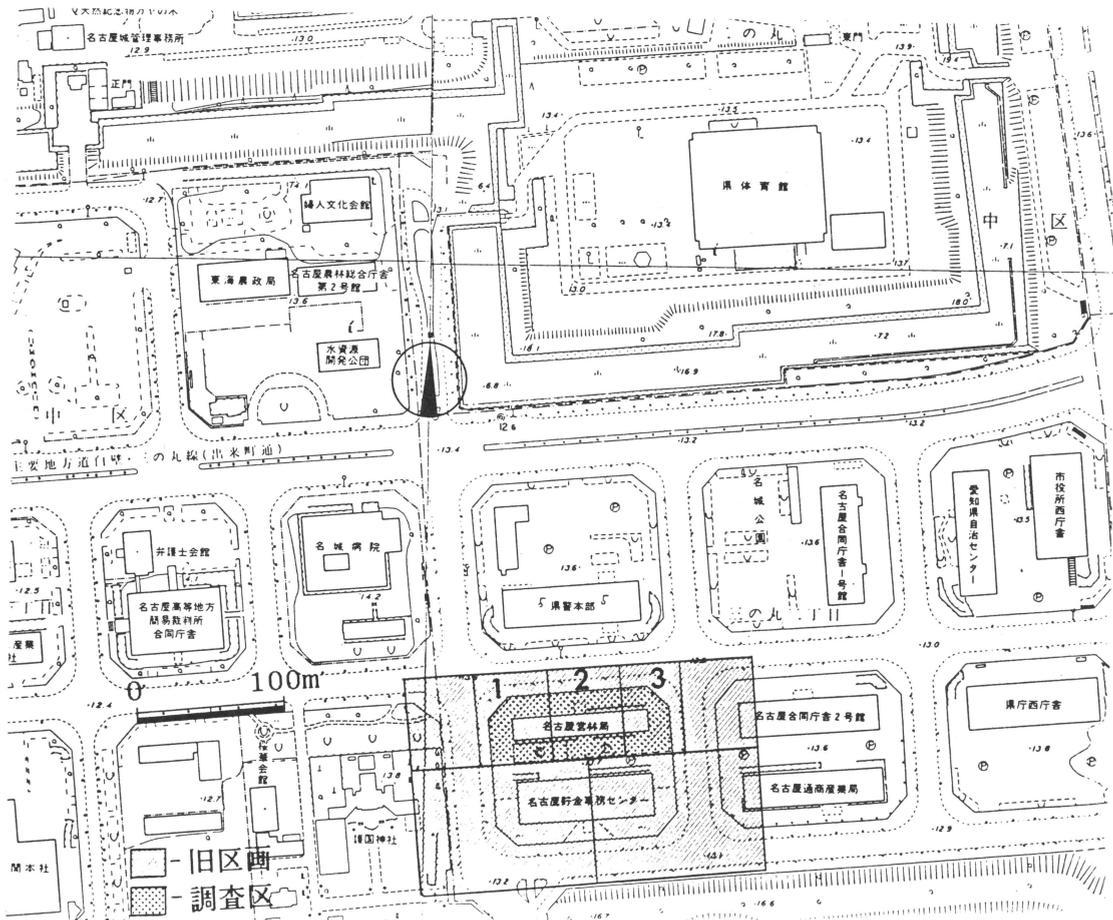


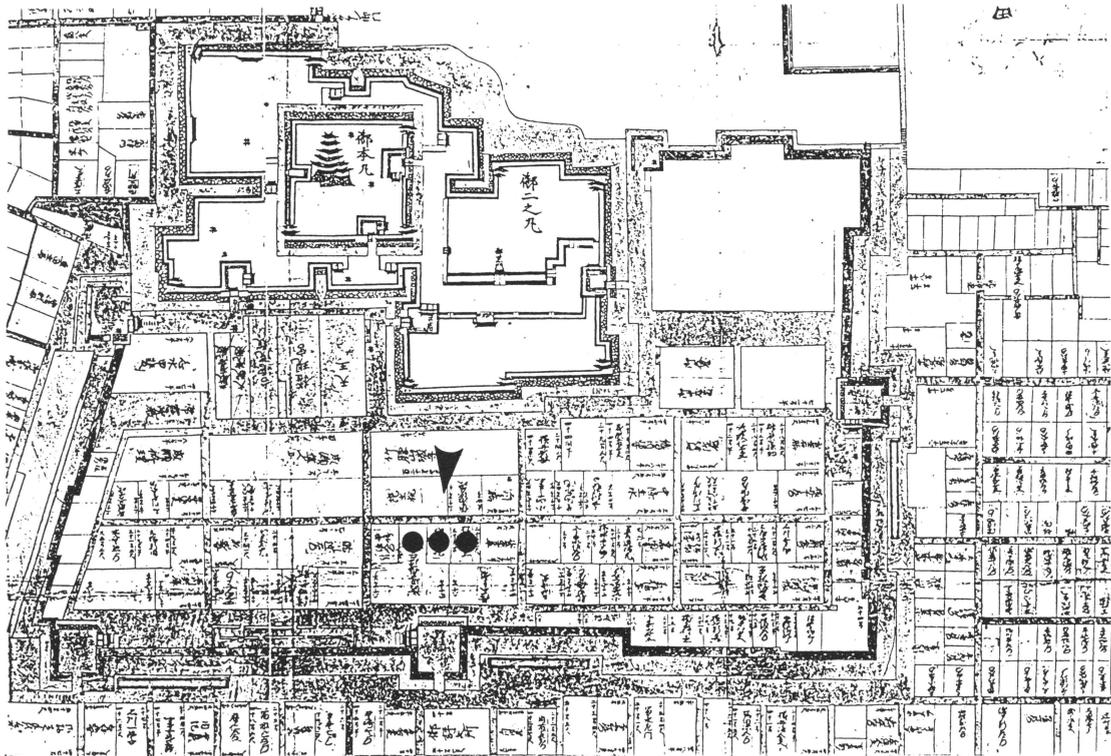
## 名古屋城三の丸遺跡

**調査の経過** 名古屋城三の丸遺跡は名古屋市中区三の丸内に所在する複合遺跡で、弥生時代から現在に至るまでさまざまな時代における生活の痕跡が確認されている。現在まで7地点における発掘調査が実施されているが、平成5年度の調査は、愛知県による「三の丸共同施設（仮称）」が名古屋営林支局跡地に建設されることになり、その事前調査として実施した。調査面積は3404㎡である（第1図）。

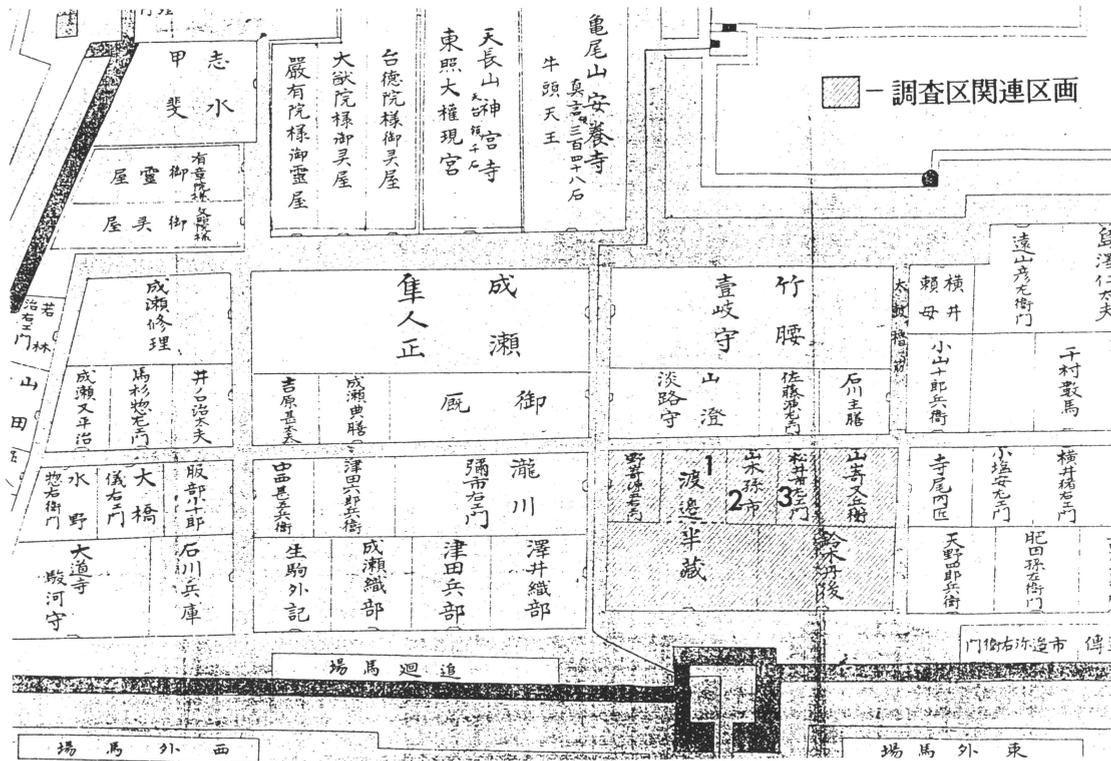
**調査の概要** 本遺跡は、名古屋台地の北西端に立地する。「三の丸」という区画は、近世城郭の中では家臣の居住域として機能していた場合が多いが、名古屋城もこの例にもれない。調査区は三の丸内では中央南端の旧本町御門に近く（第2図）、北辺を中小路、南辺を南御土居筋、東辺を御太鼓櫓筋、西辺を大名小路に囲まれた区画内に存在する（第1・3図）。この区画内には、大小併せて5～6軒の屋敷が江戸時代を通じて配されている。調査区内には、東西に3軒分のほぼ同幅の屋敷地が並立している。



第1図 調査位置図



第2図 尾府名古屋図(部分 宝永頃 蓬左文庫蔵)



第3図 名古屋城三の丸図(部分 正徳頃 鶴舞図書館蔵)

この屋敷地の伝邸関係は、第1表に示すようになりにかなり複数にわたっている。これは屋敷自体の性格が個人に帰属するものではなく、役宅的性格であったことを物語っている。調査地点における江戸時代最後の居住者は、1 = 渡辺半蔵（一万三百三十石）、2 = 横井万之助（六百石）、3 = 松井雄之助（四百石）である（いずれも世襲名）。

調査区は旧庁舎を囲む部分を南北で二分割し、4月より北側から調査を進めた。現地説明会を10月に実施し、この後南側部分を11月より調査した。

調査区における基本層序としては、近世の遺物包含層の間に、熱田層がブロック状の塊となつて多量に混じる土層があり、これがほぼ全域にわたって観察される。近世層はこの整地土と思われる層を指標として上下2層に分割し、近世上層は整地土層を取り除いた面で、近世下層は熱田層の最上面で戦国時代以前の遺構とともに検出を実施した。

#### 遺構

近世上層で検出した遺構は、溝、土坑、柱穴、井戸、庭園跡などである。これらの遺構の時期は、遺構内の伴出遺物から18世紀末～明治時代初頭までのものと考えられるが、なかでも18世紀末～19世紀初頭の遺物が多くみられた。溝の中には屋敷境と思われるもの(A・B・C)も検出されているが、溝の断面などから屋敷替えに伴う再掘削及び整地と思われる行為がうかがえる。庭園跡と思われる遺構は、屋敷地3で検出された。燈籠片、庭石と思われる玄武岩、根石を用いて据え置いた砂岩などが、掘り込みを持たずに蛇行して配されており、非実用的な配石であることから、庭の一部ではないかと考えられる。

近世下層及び戦国時代以前の遺構は、堀、溝、大型土坑、土坑柱穴などである。これらの遺構の時期は、遺構伴出遺物から、弥生・古墳・戦国時代及び江戸時代前・中期のものと考えられるが、18世紀の遺物が多くみられた。

弥生・古墳時代の遺構は溝のみであるが、いずれも南北方向に掘削されており北側に向かってわずかに下る。時期は弥生時代に関しては中期のものと思われる。

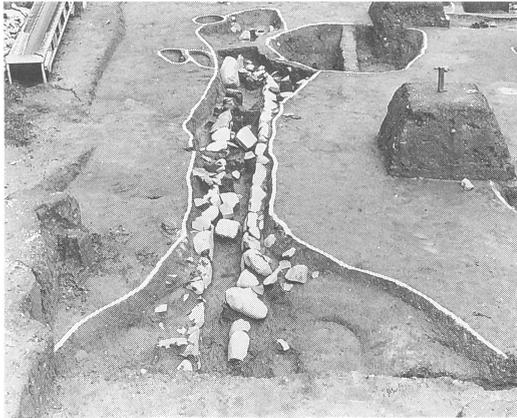
戦国時代の遺構は、堀、溝とこれに伴う柵列を検出した。調査区東端を南北に走る堀は、検出面での幅11.4m（推定）、深さ4mを測り、断面形態は逆台形を呈する。調査区南西端でコーナーが検出された堀は、これより規模が小さく検出面での幅は3.6m、深さ3mで、断面形態はやや袋状を呈する。さらに規模が小さく断面形態が逆三角形を呈する、いわゆる「薬研堀」も数条検出した。これらは、近世以前的那古野城関連の遺構と考えられる。

江戸時代前・中期の遺構は、溝、大型土坑、土坑などを検出した。なかでも大型土坑は上層では検出し得なかったもので、平面形態は方形を呈し地下式または半地下式の室的な構造が考えられる。深く掘削された遺構を南北の調査区で比べてみると、南側調査区に多く見受けられる。こうした検出状況は、南側調査区が江戸時代を通じてこの区画の屋敷裏にあつたこと、北側調査区は屋敷表に近かつたという空間構成と無関係ではないであろう。

#### 遺物

出土した遺物は江戸時代のものが圧倒的に多く、陶磁器を中心としてコンテナ800箱以上にのぼる。これらは各時代における居住者の暮らしを伝えるもの、家紋入りの瓦など居住者の推定に役立つものなど、膨大な情報をもたらすものである。平成6年度末の報告書刊行に向けて、現在整理検討中である。

（松田 訓・杉浦 茂・伊藤秀紀）



第4図 石組溝



第5図 S K 201遺物出土状態



第6図 S D 604



第7図 S D 602

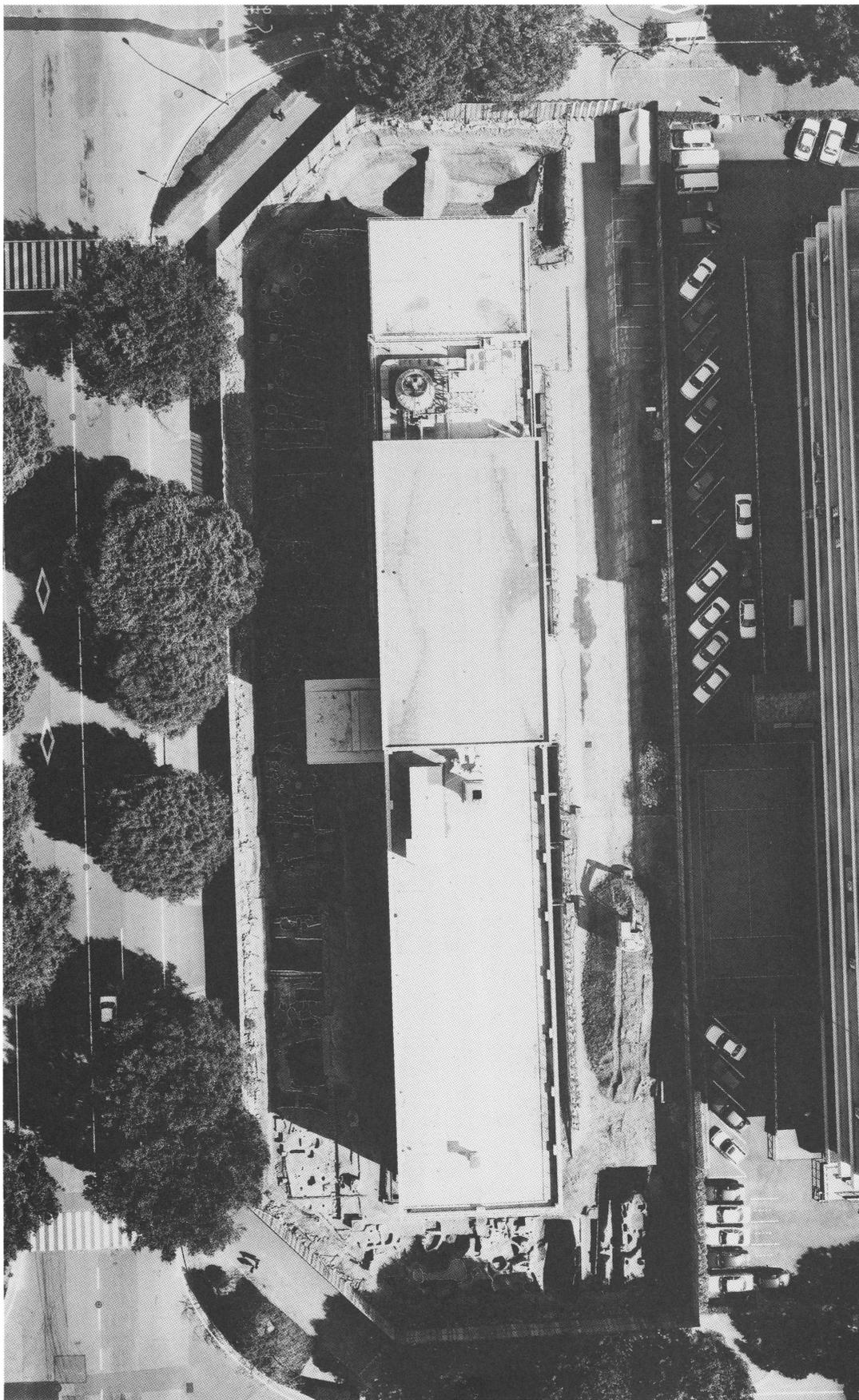
年代	屋敷地 1	屋敷地 2	屋敷地 3
1600	清水 兵助 清水 兵助 佐枝 種定 長野 重政 伊達 半平 渡辺 奉綱 渡辺 顕綱 吉田六郎右衛門 織田 貞幹 山内 知重 (渡辺半蔵添地) 渡辺 定綱	山本内蔵助 山本宗兵衛 山本 秀熊 横井 時良 沢井 元智 松井 充房 臼井 常春 臼井 常義 山本 成昌	三宅逸平治 三宅逸平治 三宅 重良 津田 信明 松井 玄吉
1700	渡辺 直綱 渡辺 綱保 渡辺 綱通	山本 成之 桜井 尚定 千賀 信賢 佐藤 忠盛 佐藤 俱忠 成瀬 正明 松井 宜喬 横井 宏時 横井 時菘	松井 弐吉 松井 一澄 松井左治馬
1800	渡辺 綱光 渡辺 岡綱 渡辺 寧綱 渡辺 綱倫 渡辺 潤綱	横井 時邦 横井 金次郎 横井 万之助	松井 要人 松井要之助 松井 吉保
明治維新	↓ 領地の寺部(豊跡)へ	↓ 領地の祖父江へ	↓ 巾下元堀詰跡で酒肆を

\* 『金城温古録』『士林新河』『旧跡踏跡略』をもとに作成

第1表 居住者の変遷



第8図 調査区主要遺構図



第9図 全景（北側調査区下層完掘写真）